

秋田の

ハロウエイツ



お父さんが地元の出身で、かまくらに合わせて帰省したというお母さんとボクがこのかまくらのお客様。幼いころにかまくらの中で遊んだ思い出を、いつまでも記憶の片隅にとどめておいてほしいもの

繰り言めいた話になるが、森吉山の樹氷を愛でようと前々から予定していた日が、よりによってこの冬一番にもなろうかという寒波の襲来と重なり、阿仁スキー場のゴンドラが停まってしまつて樹氷見物は果たせない仕儀となつてしまった。

そうかと思うと、今年の横手のかまくらは、例年になく少雪と開催日直前の雨とでコンディションが非常に悪く、「情緒あふれる雪国伝統の小正月行事」の描出には、かまくら関係者の方々は大きい苦勞されたようだ。

少し気になって調べてみたら、これは秋田市の気象観測データの統計だが、1950年ころまでは冬期間の平均気温がおおむねマイナス0.5度前後で推移していたのに対して、それ以降はプラス1度前後に転じている。わずかに1.5度程度の気温変化だが、摂氏0度を挟んでの温度変化の影響は小さくない。雪が降って当たり前、降った雪が積もるのが当たり前の冬から、降雪も少なく、降ってもすぐに解けてしまう冬が常態化しつつあるということなのだ。

かまくらは、始末に困るほどの豪雪地帯だからこそ生まれた行事とも言える。豪雪地帯であることを逆手に取った、「雪を楽しむ」という発想があったのだと思う。その雪をかき集めるのに一苦勞しなければならなくなりつつあるというのは、なんとも皮肉な様相だ。

かまくらの内部の写真を撮らせてもらおうと中に入ったついで、綿入れを着た女の子に、下世話にも「あなたたちはアルバイトなの？」と尋ねたら、「いえ、ボランティアです」という答えが爽やかな笑顔とともに返ってきた。ボランティアというといささか堅苦しさが、地元の子供たち自身が楽しむ冬の行事であるという本来のかまくらの姿が、未だ継がれているように感じられたことがうれしかった。

地球の温暖化が少しずつ秋田の伝統の小正月行事のカタチを変えていくことになるとしても、地域の子供たちが楽しみにしている「日本版ハロウィン」のような、かまくら行事の風情は永く後世につないでほしいものだ。